
エンジェル・ライフ

中嶋真蒔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エンジェル・ライフ

【Nコード】

N8896W

【作者名】

中嶋真蒔

【あらすじ】

ある日、友井千秋は不慮の事故にあい、死んだ。

このまま天国へ行き、天国で暮らす予定だったが神に会い、天使になってしまう。天使の役目は『悪の殲滅』。千秋は天使の器は借り、過ごし、悪を滅する。

だが、その仕事でとある事実を知る……………。

不定期更新です。最近忙しいので。すみません。

天使、そして戦いへ（前書き）

ファンタジーものを書くのが下手な私がファンタジーかどうか、わからないものを書きました。まだまだ未熟ゆえ、アドバイスなどしていただければうれしいです。

天使、そして戦いへ

1人、死んだ。

不慮の交通事故。学生。友井・千秋。ともい ちあき

彼は天界に運ばれようとしていた。

「なぜ？　なんで俺なんだよ！」

薄く見える体。どんどん軽くなる。

「母さん。父さん。……なあ。なんで？」

下には救急車で運ばれている母と父。そして自分。いや、自分の遺体。

彼は見下ろすしかできなかった。

「いやだ。いやだ。別れたくない」

涙と叫び。でも、誰にも聞こえない。

浮かんでいく。自分が。それから認める。死んだことを。

「ごめんな。親不幸で」

小さなつぶやき。やがて消え、意識もとぶ。

もつと生きたかったな。好きな人もできたし、やっと慣れたクラスだったのに。……俺が死んだって聞いたなら、みんなどんな顔をするかな？

思い。それは人間界への。

教えてほしいよ。なんで俺なのか。神様。なんて不平等なんだ。

悪いことは全然してないのに……。

憎しみ。それは神への。

それにしてもここはどこなんだ？　左を向けば、暗闇。右を向け

ば、光。上、下は同じ。

疑問。それは狭間の世界への。

『君は現世に帰りたいかい？』

頭の中に響く声。優しい、男の声。

『帰りたい』

口に出して言ったつもりだが、耳から聞こえず、頭に流れ込む。

『そうか……でも君は肉体を無くした。帰る場合は肉体がいる』

『どうすればいいのですか？』

『道は2つある。天使になるか。新たな肉体の生成。だが、後者の場合、何の生き物になるかわからないうえ、記憶が無くなる。どうする？』

『……天使は……なったらどうなるのですか？』

『役目をまっとうしなければならぬ。悪を滅するという。しかし、肉体は死前のまま。記憶もだ』

それを聞いて千秋は思った。

まだ、生きたかった。あそこで。あの体で。どんな形であれ、やり直せる。

『……わかりました。天使になります』

『…………君が初めてだよ。天使になりたいと言ったのは。』

とつぶやいた後、

『よし、それでは君に天使の器を授ける。役目は過酷だが、君ならできるだろう』

薄く、ほぼ見えかかっていた体に光が包み、しだいに肉体ができ
た。

『それでは友井千秋。人間界に戻るがよい』

「え？　そもそも役目ってなんですか？」

彼の疑問に謎の声は答えることはなかった。しかし、声が出た。
その事実千秋は嬉しく思い、疑問は弾けて消えた。

気付けば、病院。ベッドに寝かされていた。

右足には包帯でぐるぐる巻きにされて、動かそうとすると痛みが走った。

「変な感じだ」

とつぶやく。近くのデジタル時計を見ると日付は3日ほど進んでいた。

3日も眠っていたのか……いや、死んでいたのか。

「はあ」

溜息。でもそれはすぐに涙に変わることになった。

「え？ 千秋？ 千秋なの？」

母の声だった。先に目覚めていたらしい。

囲まれていたカーテンが開けられ、となりには千秋の母、そのもうひとつ奥には父がいた。

そして涙ながらに、

「あなた、あなた！ 千秋が目覚めたわよ」
隣にいた父も、

「ああ。ああ。よかった。本当によかった」

泣いていた。そしてじんわり彼も、

「うん。よかった。また会えてよかった」

泣いた。

一度は別れた身。再開がこんなに嬉しかったのは初めてだった。

あの後、ナースがやってきて千秋を連れ出した。

検査のためにあちこち移動させられ、機械にかけられ、もう外は薄暗くなっていた。

とにかく彼は暇だったのでテレビをつけることにした。

やっていたのはニュース番組。

『続いては、芸能人の……』

千秋たちの事故のニュースは他の芸能人のスキャンダルとかに埋もれ、消えていた。

そんなことより、時間ができた。謎の声の役目のことや、正体について考えることにした。

とりあえず、テレビの電源を切り、精神を集中させる。

役目ってなんだ？

そう思った瞬間。頭に大量の情報が流れ込む。

.....なるほど。

どうやら天使の器には最初から情報が蓄積されており、疑問に思うと、蓄積された情報に沿った内容なら頭にそれが流れ込む仕組みになっているらしい。

そして役目についてわかったこと。

『悪の殲滅』
せんめつ

人の心にある悪。それは神を信仰しないことによる自由。

とむつかしいが、簡単にいうと『世間から見ても、それはダメ』と思われるものや、純粹に悪とされているものを消すこと。だった。

そうなる、あの謎の声は『神』になる。

神と会話したのか……。

おいおい考えると恐ろしいものだった。

方法は？

疑問に思うと頭に情報が流れ込む。

なにこれ！？ おっそろしい。

と彼が思うほど過酷そうなものだった。

朝。9時ごろ目が覚める。ナースの人が「検査しますね」と千秋の点滴を外す。

そして、肌と肌が触れる。

「.....へえ」

「？ どうしたのですか？」

「いえ。すみません」

殲滅対象となりうる『大きな悪』があった。

肌が触れ合うと悪の存在がわかるようだ。小さな悪は消す必要が

ない。バランスが崩れてしまうから。

人というのは善と悪があり、だいたい半分ずつある。片方に偏るかたよと犯罪を犯したり、うつ病になったりする。だからたまに善を消すこともある。そうやって心の秩序を作るのだ。

やるか……。

ハート・オペレーション

「心の操作」

「え、なん……」

時が止まる。触れ合う肌。そこが冷たくなる。

体が動かない。でも、意識が冷たくなった場所へ。

「うわ。変なの」

そこはどこか狭間の世界に似て、自分の立っている場所はよくわからない暗闇。そこも見えない。上を見上げると薄く光っていた。

まあ、想像に任せます。

情報が頭に。

『周りの悪に影響されてはいけない。心を強くもて』

天使も悪に侵されることがある。しかし、それは心しだい。

『悪を放出する物体がある。それを潰せ』

千秋は辺りを見回す。何もない。

だから、濃い闇に進んでいく。

「見つけた」

子どもっぽい声を出して喜んだ。ひたすら歩き続けたため、暇だったのだ。

サッカーボールぐらいの球体がふよふよと浮かび、黒いガスがところどころに開いた穴から漏れ出していた。

近づく。

「痛っ」

壁みたいなものにぶつかる。でも見えない。

それは心の壁。人が無意識に創造している、侵入を許さない門。
ノ・イン・ベイジョン・ウォール
不可侵壁。

どうやって破壊するんだ？

『呼びかけ、警戒心を解くのだ』

ここからの声は心に直接届くらしい。不可侵壁に手を置く。

このナースの思い出、記憶、そして感情。が感じられる。

男の人にフラレたのか……。

憎しみ。はつきりと伝わった。

さてどうしようか……。

「おい。聞いてくれ！」

大声で叫ぶ。2秒後、触れている手から伝わる。

『誰？』

「僕は……天使。そう、天使だ」

『なにそれ？ 信じらんない』

「なら、信じなくてもいい。でも貴女あなたに話があります」

『……なに？』

「あなたは今、何がしたいですか？」

『え？』

「言い方を変えます。何をやりたいですか？」

『それは……復讐。あいつに復讐がしたい』

「どうして？」

『あいつが私をふったから』

「もしそれが仕方がないことだったら」

『どうということ？』

「僕は天使だからわかるんです。彼は引越引っ越しするんです
嘘だ。」

『そんな……ほんとなの？』

「ええ。本当です。……彼はあなたとの別れが辛かった。きっとあなたも辛くなると思う。そう考えた彼はふる形で別れ、自分を忘れさそうとした。もちろん彼も忘れるため」

『う……うそ……』

涙声。

「だからもう彼を忘れるべきなんです。自分のためにも」
『ぐす……うええええん』

大声で泣き出した。これでもう大丈夫だろう。

泣いたせいで消えた壁を越え、悪の根源と対峙する。
ったく。どうやって破壊するんだよ……。

『自分が思い浮かべる武器を作れ』

武器ですか……。

なぜか敬語。

拳銃にしようかな。かつこいいし。
目をつむり、思い浮かべる。

『手を前へ』

出すと、光が包み込む。

『もう変えることはできない。悪の殲滅はその武器でやりまたえ』

光が消え、千秋は目を開けた。

「え？ ……なんで？」

拳銃をイメージしたが、出てきたのは剣。日本刀のような剣。

「ジャグプリオン」

でも、『和』は感じられず、『洋』が感じられる。

これは想像したものと違うんだが……。

『……………』

頭に情報は流れなかった。

変だな……………でもいつか。

勝手に納得し、悪に剣を向ける。

「え？ ……うわうわわ…」

悪は形を変える。犬のような胴体、頭は3つ。真っ赤な目。鋭い牙は有する、ケルベロス。に形を変えた。

ギリシャ神話では有名な地獄の番犬。千秋はそれと向かい合っている。

グルグルとのを鳴らし……………吠える。

「ガアアアオオオオオン！！」

思わずのけぞってしまう。

んだよ。でかすぎだろ。

だいたい、高さは3メートルほどあった。

『恐れるな。退いたら君の負けだ。大丈夫。負けはしない』

あれ？ 今までの声と違うような。

と少し疑問に思う。だが、そんな暇はなかった。

「うわつと」

左の首が噛みついてきた。

『私が指示しよう。今回だけだからな』

あれれ？

普通はこんなしゃべり方ではなかった。しかし、ケルベロスの攻撃が怒涛のように迫る。

「あゝ頼む！ どうしたらいい？」

『よろしい。相手はケルベロス。楽勝だ』

戦うのは俺だぞ。

『ん〜琴！ 琴はあるか？』

「あるかボケ〜！ それに戦闘中だぞ！」

『じゃあ、ソップっていう菓子あるか？』

「あるか！ そういうのは戦闘前に言え」

と言った瞬間、火球を吐いてきた。それをサイドステップでよける。

『ん〜……君の武器はなんだ？』

「ジャグプリオンとかいう剣だ」

『はあ！？ ほんとに！？』

「ああ。そうだ。驚くことなのか？ おっとつと」

今度は右首の噛みつきはバックステップでよける。

『そうか……なら大丈夫だ。それで首を一発で切れ』

なんつーむちゃぶり。

その瞬間、チャンスは訪れた。

両首の両サイドからの噛みつき。

「も〜らい」

前に踏み出し、真ん中に首と対峙する。

だが、真ん中の首も反撃しようとした瞬間。

「ザシュ！」

右に振り上げ、孤を描くように切った。

3つの首はすべて落ちた。

つーか剣、長っ！

あんなに高いところにあった首が切れた。剣が伸びたのだ。

「……………あ」

ケルベロスは塵と化した。

「なあ、どうすれば出れるんだ？」

千秋の疑問に答えたのはさっきの妙に近い感じの声とは違ったものだった。

『飛べ』

なに？ 天使の羽根で？

と思ったがジャンプしただけで、器に戻る事ができた。

「ですか？」

さっきのナース。時間が動き出した。

「いえ、なんにも」

「そうですか」

彼女は満面の笑顔を作った。ハート・オペレーションをする以前とは比べものにもならないくらいの。

その笑顔を見てついニヤけてしまう。

なんか……………な。

彼は良い気分だった。

ところで、さっきのナースには不可侵壁の会話の記憶は覚えていない。というか知らない。

あれは無意識のものだから。

しかし、彼女の心はバランスがとれている。へんな気を起こすことはないだろう。

さて、千秋に疑問が増えた。器の情報ではわからないことがこれからこんなのがまだまだ続くのか……。

少々、憂鬱ゆううつだった。

天使、そして戦いへ（後書き）

まずは1話。伏線等も何個か載せていただきました。
長い目で見てくださいるようお願いします。
では次の話でまたお会いしましょう。

新たな仲間、共闘（前書き）

2話目です。書いてて、展開が少し早いかなと思いましたが、良い感じにできあがりました。

新たな仲間、共闘

入院から2週間。足は完治してないが体に異常はないので退院することになった。

最初の週はクラスメイトが何度か見まいに来てくれたが、しだい来ることもなくなった。

薄情なやつらめ……。

と千秋は心の中でつぶやいていた。が、ま、いつか。

一度死んだと思うと、なんだかどうでもいいことになっていた。

あれからケルベロス戦に出てきた声は千秋が何度呼びかけようが返答することはない。

あれは……女の人の声かな？

千秋はそう思う。

どこか身近な感じ……まるで、同年代のような。

その予想は当たることになっていた。

「ふああ」

退院した次の日、気持ちのいい晴れた朝。

千秋は自分の部屋を出て、居間に向かう。

「おはよう」

母は弁当を作りながら千秋に優しく微笑む。

ああ。……なんだかなあ。……。

何度も感じた、生きたここに。

「おはよう」

「千秋……歩きにくくない？」

「うん。大丈夫」

実は今、松葉杖状態で過ごしている。右足は動かない。朝ごはんを食べ、仕度をし、家を出る。

「じゃあ、いつてきます」

「いつてらっしゃい」

千秋の母は手を振って見送った。

やっぱり、歩きづらいな……。

普段は10分で着く距離の学校がとても長く感じる。

「おお。千秋じゃねえか」

「お、よう」

1人、男の子が話しかけてきた。

「なんだよお前、交通事故に遭^あつたんだって？」

「その会話、病室でしなかったっけ？」

「ん？ そうか。まあいい。仕方ないから一緒に行つてやるよ」

一緒に行く人がいないだけだろう。

「はいはい」

千秋はニヤけ顔の彼と歩きだした。

さっきの彼の名は、久原^{クハラ}・春人^{ハルト}。

ごく普通の高校生。千秋とは違い。それに親友である。

……………。

千秋は春人の肌に触れてみた。

「お前……彼女、できただろ？」

「うぐっ、なぜそれを？」

春人は善が少し多めで悪が微妙に少なかった。だから、最近良いことがあつたに違いないと千秋は考えたのだ。

「いやゝまあな。……………はあ」

思わず溜息が出てしまう。

「な、なんだよ。千秋の入院中にできたんだぞ」

それを聞くとますますげんなりする気持ちになった。

いいさ。俺にだって……っ！か、俺がいないうちにこいつは……
とにかく、登校。

「おはよう」

ひさしぶりの教室、前と変わらずにぎやかである。
そのため、千秋のあいさつはかき消された。でも、1人。反応し
てくれた。

「おはよう」

彼女は千秋に向け、何か書きものの手をおき、微笑んだ。
そしてまた、作業に移る。

……………。

千秋の胸の鼓動が速くなる。

かわいいな。

そう、千秋の好きな人だ。名は神冬・優美^{シントウ ユウミ}。普通の一般人。
新学期、早々に好きになった。

普通に授業を受け、体育の時間は見学。昼休みに突入した。
よくしゃべる菊人と昼食を食べ、ホッと一息ついているとある
人物がやってきた。

「ここに友井千秋君はいる？」

女の子。千秋を見つけ、『こっちこっ！』と手振りする。

松葉杖でゆっくり教室の入り口に向かう。

「なんですか……って君だれ？」

「あゝれゝ聞き覚えない？」

どこかで聞いたような……あ！

どこか身近で、同学年そうな声。ケルベロス戦で聞いたあれだっ
た。

「まさか……悪？」

「違う！ あの時アドバイスしたじゃん」

「うそうそ。わかってますって。あの、俺を投げ出した声でしょう？」

「投げ出したって……ジャグプリオンだから大丈夫かなって……」

「投げやり！ ……まあいい。そのジャグプリオンって何？ そもそも君だれ？」

「質問が多いわね……」

お前のせいだろう！

「まず、ジャグプリオン。あれは三大聖剣の一つなのよ。特徴は伸び縮みする、おもしろい剣なのよ。あ、ちなみにローランは人の名前だからね」

「ふ〜ん」

としか言いようがなかった。

「で、私。アルヒヤイ ナツムラは権天使の夏村・蓮華。レンカあなたは天使の友井千秋でしよう？ 天界じゃ有名よ」

「そのアンゲ……ってなんだ？」

「？ 天使の階級よ。知らないの？」

「当たり前だよ。第一、天界に行ったこともないのに」

「あ、そっか。アンゲロイとかはさっきも言った通り、階級のことよ。あなたは一番下」

そうですか。

なんだか複雑な気分になる。

「でも、天使でアンゲロイケルベロスを倒すなんてやるわね。実は私、手伝うように言われてきたの」

その言葉を聞いて、有頂天になる。

「そ、そうか？」

「ええ。でも剣のおかげでね」

身も蓋もない。

「ところで、なんで俺は天界で有名なんだ？」

「そりゃ、人間から天使になったんだから
あ、そうか……。
神がつぶやいていた言葉を思い出す。」

『君が初めてだよ。天使になりたいと言ったのは』

俺が初めての……。

物思いにふける。まだ10代なのに。

「とりあえず、同じ学校なんだから共闘することもあるでしょ。そのときはよろしくね」

蓮華はそう言い残し、自分の教室に戻っていった。

「はあ〜」

千秋にたくさんの情報が入り、げんなりした気持ちになる。

「ちよつと、友井君。手伝ってくれる？」

千秋のクラスの担任である島崎教諭は一時的に荷物を持つよう頼んだ。教室の教卓にて。

普通、けが人に頼むか？

と思いながらも、荷物を受け取る。

「！……なんかすごいね」

「？ そんなに重い？」

「い、いいえ」

さつき、島崎教諭の肌に触れた。

そこで感じたのは、『大きな悪』。あのナースよりはるかに大きい悪。

今やるか……？ いや、俺じゃ無理か……。

千秋の危機感知能力がダメだと伝えた。

「はい、ありがとね」

荷物を本人に渡し、夏村の教室へ向かう。

「……というわけなんだ」

千秋はおおざっぱにさっきのことを伝えた。

「なるほどね……。なんの悪魔かしら……。ま、あれやらないと
わかんないわね」

ハート・オペレーション
あれとは心の操作のことだ。

というわけで、島崎教諭の元へ。

「先生。ちょっと手、見せてもらっていいですか？」

千秋は教卓前で作業している彼女に言う。隣には夏村。

「え？ どうして？」

「いいから」

夏村は強引に手を握った。こっそり千秋も。

『ハート・オペレーション』

同時に言った。

「何？ どう……」

時間が止まった。体が動かない。前と同じように触っている部分が冷たくなる。

そして意識が中へ……。

「うわゝ気持ちわりい」

千秋は弱音をあげた。

光と闇の狭間の世界。黒いガスが彼らを包み、辺りは前より暗い。
「うるさい。闇に負けたら終わりよ」

「はい。ごめんなさい」

「それにしても濃い悪ね。大物でもいるのかしら」

「わかんの？」

「カンよ。カン」

「なにそれ」

少し馬鹿にしたように言つと、

「文句あんの？ 行くわよ」

「はーい」
とぼとぼと進んだ。

しばらく歩くと、これまたサッカーボールぐらいの球体があった。
「さて、ノン・インベイジョン・ウォール不可侵壁をほどこしますか」

千秋は腕をぐるぐる回しながら言った。

前回もうまくいったし、今回もできるだろう。

壁に手を置いた瞬間。

「千秋！ 下がって！」

その言葉に反応し、千秋は大きくバックステップをする。

「な、なんだ？」

「敵よ」

声の主は夏村。

前方を見ると、足元に黒く、禍々しい魔方陣が3つ出てきた。
そして召喚される。悪魔が。

「グウウウウ」

蛇の尾、山羊の胴体、ライオンの頭を持つ、キマイラ。

前と同じ、ケルベロス。

そして、ケルベロスの弟であり、首が2つの、オルトロス。
が、不可侵壁を守るようにいた。

「3体か……きつそうだな」

「きついじゃないわよ。ケルベロスはともかく、オルトロスは厄介やっかいなんだから」

「そうなのか？」

「ええ。オルトロスは頭が良いの。長期戦になると、とても勝てやしない」

「戦ったことあるのか？」

「ないわよ！ 本で見ただけ……とにかく、武器を出しなさい」
「うん」

ジャグプリオンをイメージさせ、出す。

眩^{まよ}い光。美しく長い剣。

隣では70センチほどの双剣を持った夏村がいた。

「あなたはケルベロスを速攻で殺^やつて。私はあとの2体を惹^ひきつけておくから」

「へいへいと」

軽い返事をしたあと、夏村は片方の剣を投げた。

やつらはキメイラ、オルトロス、ケルベロスの順で、たたずんでいる。

投げた剣で良い具合に2体と1体に別れた。

「お前の相手は俺だぜ」

千秋は2つの首までは落とした。でも、真ん中のだけ切れない。バックステップばかりする。

「ちつ。めんどくせえ」

にらみ合っていると近くから悲鳴が聞こえた。

「ひゃっ……いつつつ」

やばい。早めにけり、付けないと……。

と焦る。でも、どうしたらいいのだろうか。一向に倒せない。

『気合いで振れ』

突然、流れた。情報が。

器らしくないな……。

「うおおおりやあああ」

少し重くなった剣を思いつきり振る。

長くなったジャグプリオン。ケルベロスの胴体ごと真つ二つにした。

「はあはあ」

とても疲れた。

ひざまづくと夏村が駆け寄ってきた。

「何？ あんたがやったの？」

他に誰がいるんだよ。それより……。

「他の2体は？」

「あんたのその一振りで切れちゃったよ。ほんと、がんばってたのに」

そっぽむいた。

「ごめん……」

「べ、別に謝ってほしいんじゃないやなくて……」

どうしたらいいのだろうか？

「じゃあ、俺のためにがんばってくれてありがとう」

と、千秋は夏村の頭をなでた。

彼女は赤くなり、

「つ、次は私がいなくても倒せるようにがんばりなさい」
なぜか上から目線だった。

「島崎さんですね？」

「はい。……どちらさまで？」

不可侵壁に手を置き、千秋は話しかける。

「僕は天使です。あなたに用があつて話しかけました」

「天使？ 変な人ね。……それで、どんな用？」

「あなたは今、どんな気持ちですか？」

「今？ 今は……しんどい……わね。なんか……疲れた」

「それはどうして？」

「そのままよ。この学校に勤めて2年。ろくに雑用しかしていないわ。あとは授業。生徒はみんないやな顔をするもの。逃げ出したいくなるわ」

「そうですか……でも、教員免許をとって最初のほうなんてそんなものですよ」

実際は知らない。

『そうなの？』

「ええ。そうですね。もう少し我慢したらきつと変わるはずですよ。それに生徒」

『生徒？』

「ええ。貴女の担任の生徒たちは常に笑顔です。貴女が知らないだけでみんな学校生活を楽しんでいる。すべては島崎先生。あなたのおかげだ」

『本当なの？』

わからない。

「もちろんです。あなたは……もう少し教師をやってほしい」
これは千秋の本心でもあった。

『……そうね』

その一言は希望に満ちあふれていた。

やがて不可侵壁が消え、内部に入る。悪との対峙。

千秋と夏村は武器をかまえる。

悪はボール状からくねくねと姿を変え……。

「とんだ大物ね。さっきの3体を見て思ったけど、これは……」

「これは？」

千秋は聞く。

悪はやがて3メートルになり、下半身は蛇みたいで上半身は見るからに美女。

「エキドナ」

「えきどな？」

「ええ、そうよ。不死の存在とされ、あの3体の母。……最悪だわ」
どうやら、とんでもないやつと出会ってしまったらしい。

「なんで？ 倒せないのか？」

「無理よ！ ドミノンス 主天使以上の天使しか倒せない。せめてアルゴスの槍
さえあれば……」

2人でぐちぐち騒いでいるとエキドナが動き出した。

戦闘対戦に入る。

「え？」

エキドナはくねくねと体をひねらせ、どこかに飛んでいった。
辺りの闇は消える。

「どっか行っちゃったな」

なにげなく夏村に話しかける。

「そうね。……おそろくやつは……ここでパワーを溜めていたのね……」

どこか残念そうだなまなざし。千秋は感じた。
強くならなくてはと。

新たな仲間、共闘（後書き）

いろいろと専門的なことができますが、なんとかわかるように書いたつもりです。わからなければ質問等、お願いします。もう少し進んだら、設定資料とか書きたいと思います。それでは次の話で。

神殿化

「は？　なんで？」

土曜の朝。千秋は頭にハテナマークを浮かべていた。

「う、動くぞ……」

骨折していた右足が動く。昨日まで、痛くてしかたがなかったのに。

それに……妙に疲れを感じないというか…。

この間の3体戦。千秋は相当疲れた。体がとてもだるかったのだ。しかし、夏村はけろっとしていた。

だが、この朝で全快。

蓮華^{レンカ}に聞いてみよ。

電話にて。

「はい、もしもし」

『あ、千秋？』

「ふう〜。そうだけど」

『何？　朝ごはんでも食べていたの？』

「うん。まあ……」

『はあ〜のんきなものね……って違う。そんな恋人みたいな話があるって電話したんじゃないの！』

「うん。俺も電話しようと思ってたんだ」

『そうなの？　……まあ、とりあえず。千秋、呼び出しがかかったわよ』

「誰から？」

『グランディーナ様からよ』

「誰？」

『はあ〜。その言葉は本人の前で言わないでね。消されるわ』
「う、こえよ」

『……とにかく、今からあなたの家に行くから。待ってなさい。それじゃ……』

「あ、ちよつと待って」

『何？』

「今日さ。俺の右足の骨折が治っていたんだよ。なんでかわかるか？」

『ああ。そのことも話すから。それじゃあつさり切られた。』

さて、突然だがなぜいきなり「千秋」「蓮華」の関係になったのか。

それは別に大した意味はない。

「蓮華って呼んで」

「ああ。んじゃ俺も千秋って呼んで」

というだけであつた。……説明が必要かなと思ひ……。。

「おじゃましまーす」

蓮華は大きな声で言った。

返答したのはだるそうにしている千秋。家に両親はいない。

「はいはい。お茶入れるから待ってて」

彼女を居間に通し、適当に座らせた。

麦茶を持ってくると、

「ありがと」と言い、ちびちびと飲みだした。

良くみたら……。

かわいいかな。と千秋は思った。

パッチリとした目、きめ細かい肌、学校ではポニーテールだが今はツインテール。それが奇跡的なぐらいマツチしていて、体の細さがはつきりと出た。

「何よ」

蓮華は上目づかいで千秋をにらんだ。でもそれがかわいく見えて

しまい…。

……………反則だろ。

千秋の鼓動が少し速くなった。

「何よ」と蓮華は、言った後。

なに、じろじろ見てるのよ。……………恥ずかしいじゃない。
麦茶を置いて目を逸らす。

……………。

170ちよいと高校生では一般的な身長だが、格別細いというわけでもなく、がっしりしているとえば、違うかな。という感じが少しキリッとした目に黒髪がかかり、神秘的な表情を作り出している。

ほんの、ほんのちよつと…かつこいいかな……………。

乙女である。少し頬を染める蓮華がいた。

「……………。」

しばらく沈黙が流れる。

「……………はっ！ 違う違うちがう！」

「ん？ どうしたの？ 蓮華」

「こんなほのぼのしたことをやりに来たんじゃないの」

「じゃあ、何をしに来たの？」

「さっき言った通り、呼び出しがかかったの。だから」

次の言葉で千秋はそんなバカなと思った。

「ここを神殿化するわよ」

蓮華にしては真剣なまなざし。

やるっぱいな……………。

「え〜と…こんなんでいいのか？」

「うん。OKよ」

およそ15畳の居間の家具の配置を少々いじっただけである。

真ん中付近に椅子を置き、それを囲んで長方形を描くようにのりや水筒など、円柱のものを並べた。ただ囲いの中には椅子しかない。

似たようなことがとあるがつくとある小説にやっていたような……。

と千秋は考えるも細かいことは気にしてられない。

蓮華は正座をし、手を貝にして組、目を閉じて言う。千秋もその隣に座った。

「大いなる存在よ。天に住まう住人よ。我、夏村蓮華の導きに答えよ」

……………なっ!?

辺りは青く、白くなっていき、空間が曲がるような感覚に陥る。おちい

そのせいで千秋は吐き気がした。

ほんの3秒で神殿化は終了。周りの景色はたいして変わっていない。ただ、長方形の空間、そこだけが白いレンガ造りで椅子が石造りの趣おもむきのあるものになっていた。

そして上から降りてくる。天使が。

長く、白い髭。髪も白く、服装も白いロープをはおっていた。弱い老人に見えるが漂う雰囲気は周りの空間を歪めてしまいそうなくらい威圧的である。

「グランディーネ様。私の導きに答えていただいたことを深く、感謝します。そして、彼のものが友井千秋です。彼にいったいなんのようでしょうか？」

とても丁寧に言う。しかし、千秋は蓮華から緊張の色が見られるのを悟った。

「ふむ。別に簡単なことだ。天界のこと、天使のことを少し学ばせてやろうと思って」

「そ、そんな! このようなものには私1人で十分です。わざわざ

お手を煩わづらわせることなどしなくてもよろしいかと……」

「いやいや。こやつを見たいと少々思つてな。なにやら三大聖剣の一つ、ジャグプリオンを武器として所有しているではないか。だからでな……」

「そうですか……。それでは私はこれから一切、口を挟みません」

「そうしてくれ」

「……………」

さて、これから俺はどうしたらいいのだろうか。

なんとなく気まずい空気が流れていた。

「それでは、友井千秋よ。お主に天使の器を与えたのは私だ」

いきなり衝撃の事実を聞かされた。

待てよ……。まず、この状況でだいぶ意味わかんねえんだけど……。

「はあ。ありがとうございます」

とにかく千秋はうさんくさそうな目でグランディーネを見ながら

答えた。

「まったく、天界に来てあんなことを言うやつは初めて見たよ」

「え？ なぜですか？」

「樂園だからだ」

「そうですか」

「では、天界のこと、天使のことに教えよう」

それから、千秋はさまざまなことを聞いた。

天使の階級のこと。グランディーネは最上位の熾セラ天使らしい。

天使は心の操作以外にも使える能力があること。

その他モロモロ聞いた。

「あの……俺の右足完治と疲労回復はなんですか？」

「私が治したのだ。そのほうが動きやすいだろう？」

「ありがとうございます」

「うむ」

「それと、なぜ器に情報があるのに僕に色々教えようとしたのですか？」

千秋の質問にグランディーネは眉を顰^{ひそ}めた。しかし、すぐ普通の表情に戻った。

「きつかけが必要ではないのか？」

言われてみれば確かにそうだ。

「そうですか」

「では、私は帰る。これからの仕事も気をつけてやるのだぞ」

「はい」

囲いに光が包まれ、元の風景に戻った。

「……はあ」

「どうしたの蓮華？ 辛気臭い溜息なんかついちゃって」

「私、あの人嫌いなんだよね」

「なんで？」

「私を見る目が何と言うか……眼中にないというか……」

「それ、矛盾してない？」

「あーもういい」

キレてしまった。

んだよ。せつかく人が心配してやってんのに。

と千秋は思った。蓮華は、

どうしてわかってくれないの？ それともわかつとしないだけ？
すれ違つ心。

ここは神殿。ギリシャのパルテノン神殿がある。そこへ続く道は険しい階段。階段の横は手すりの代わりに雲。もしくは白い煙のようなものが漂う。漫画やアニメぐらいにしかなさそうで幻想的な世界。

天界だ。たくさんの天使が住み、人間の魂も漂う。悪はまったくない樂園。ここの機能はいくつかある。

奇跡の管理。人間界にある奇跡は天使が起こしている。人間が無意識強く求めれば起こす。ただ、天使のきまぐれが多い。

秩序の維持。極端に悪が増えたりすると秩序が乱れ、すべての世

が崩壊する。この天界も含めて。空間、悪に干渉できない人間に変わり、天使は働いている。

人間界の存続。人間界は天使にとって鍵になる。なぜなら人間界を土台に天界が成り立っているから。土台を失うと天界は空中分解する。それを防ぐのだ。以前、地獄の住人である鬼たちは人間界に侵攻、存続が脅かされたため地獄ごと鬼を消した。それほど大事なことなのである。

パルテノン神殿は上位階級の天使が集まり、これらのことを話す。神殿内部には20人ほどの天使がいた。大きな円卓を囲む形で座り、ひととき特別な椅子にはグランディーネがいる。

「これから会議を始める。観察に行った友井千秋についての報告、これからの活動について話そう」

彼は大きな声で言った。

普段とは違う、例外的な会議。1人の最下位天使の話だった。

神殿化（後書き）

特殊なことが続きましたが次から日常編スタートできると思います。

学校生活（前書き）

大分、日にちが開いてしまいました。すみません。

学校生活

朝。学生の普通の時間帯に起きる。月曜は千秋にとって、憂鬱なものだった。

あゝあ、これからもまた始まるのか……。と、毎週こんな感じである。

疲労はない。良いことなのだが、おかしい。昨日の話によれば誰も回復させるようなことをしてないらしい。

つまり、普通に回復した。ことになる。

ま、いつか。生活さえできれば。

最近、非現実的なことが起きても驚かなくなった。これが高校の力か。とわけのわからない解釈をしている。

朝ごはんを食べ、家の近くにいる春人と合流した。

「よう、千秋」

「おう。おはよう」

さわやかなあいさつを告げ、2人は歩きだす。

「で、彼女とは良好なのか？」

「もちろんさ。昨日、デートに行ったぜ」

「死ね」

「ええ！？ いきなり!？」

昨日は神殿化で千秋の頭のなかはぐるぐる回っていた。

なのにこいつは……。

ちよつとした逆恨みである。

「で、昨日は何してたんだ？ 千秋」

神殿化のことはあまり言わないほうがいいかと判断した彼は、

「んゝ。家でごろごろしてたぜ」

と答えた。ところが、春人はくっくく、と笑いながら言った。

「ウソだ。昨日、誰か女子がお前ん家に入っていくの見たもんね」
なんとも不幸である。これは蓮華が悪いと千秋は思った。
それに中学生か。お前は。

「し、知らねー」

「ほう、白を切るつもりか。でも、俺の彼女曰く、夏村蓮華つつー
やつらしいぞ。いやゝすみに置けないねゝ」

んだよ。急にペラペラと。うぜえよ。

「はいはい、そうですか」

千秋はすたこらと早歩きで進んでいった。

「おい。ちよっ……」

後ろから春人もついて来る。

普通に授業を受け、昼休み。

それまでに千秋はいろんな人と肌が触れたが、たいして大きな悪
はなかった。

「なあ、一緒に食おうぜ」

春人が千秋を誘った。

「1人で食つとけ」

「なぜに笑顔！？　そしてなぜ拒否る！？」

「疑問が多いなあ……死ね」

「また！？　……ははーん。まだ気にしてんのか？　自分が彼女で
きないからつてなあ……夏村がいるじゃねえか」

あゝこいつの心、壊してえ。

「なあ。ちよつと俺にタツチして」

「？　なんで？」

「いいから」

春人は恐る恐る、手を出してきた。

「は！？　憎しみのオーラが！」

ところが、さつと手を引っ込めてしまう。

ちっ。おいしい。

「さて、鈍器は……と……」

「なぜ探す！？　そして何をする気だ！」

「大丈夫。すぐ行ける」

「やめて……その顔……悪意を感じる笑顔だよ……」

「ちっ。しゃーねえ。今からお前がしゃべる会話の名詞の前にはナツコさんって入れる」

「難易度たけっ！　だいたい、ナツコさんって誰？」

「炭酸水素ナトリウムの分子のあてロゴみたいなもんだ。別に炭酸水素ナトリウムって言ってもかまわないぞ」

「う……がんばります」

「じゃ、飯にするか」

千秋と春人は弁当を開いた。

「今日のメインは手羽先か……うまそうだな。お前のは？」

「ナツコさんと俺か？　んーと……ナツコさんからあげかな」

「とんでもないもの食うんだな……」

「ナツコさんとお前が言っただろ！」

「あ、敵にまわった。まあ、食われるもんな」

「ナツコさんを人と一緒にすんな！　……いいよ。炭酸水素ナトリウムにしてやる」

「あっそ。俺の手羽先とたくわん、交換しようぜ」

「炭酸水素ナトリウムとたくわんでいいのか？」

「いや、アルカリ性のはいらない」

「本当についてこねえよ！　とりあえず、ほら」

「サンキュ……んゝご飯にはこれだな」

「まさか炭酸水素ナトリウムとお前がおばちゃんみたいだったとは……」

「は？　たくわん、なめんなよ」

「いや、別に炭酸すい……あゝもうめんどくせ。もっと楽なのにしてくれよ」

「んじゃ……語尾にあなたってつける」

「なんだそれ……まあいいだろう」

「今日の終わりまでな。それ」

「う、わかったよ。あなた」

「男が妻の役、やるって……絵ずらわるっ」

「う、うるせえよ。あなた。……そんなことよりさ、反抗勢力^{レジスタンス}って知ってる？ あなた」

「ん？ ゲームとかに出てくる、VS魔王みたいなあれだろ？」

「うん。まあゲームではそれだけど、あるんだって。この世界に。それと、あなた」

「ふん。何と戦うんだ？ それと、一時的にそれやめろ。うざい」

「わかった。それで、何に反抗してると思う？」

「悪魔？」

天使の千秋はそれしか考えられなかった。

「ベタだな……。違う。なんと、」

はたして、本当なのだろうか。彼の言葉は聞いたとき、千秋は思った。

「天使なんだ」

は？ バカじゃねえの？

千秋は心底、思った。だって、悪を滅するんだぜ。逆に良いことしてんじゃん。それに人間が天使なんてわかるのか？

「で、本当は？」

嘘だと思っ彼は真実を聞こうとした。しかし、返ってくる言葉は、

「天使だって。以外だろ？」

春人の能天気なセリフを聞いて、千秋は茫然とするしかなかった。

……。

心にはなにも浮かばない。自分の存在を否定されることはそういうことだった。

「おい。聞いてんのか？　だいたい、俺たちのは関係ないじゃないか」

その言葉で我に帰る。

「……なあ。なんで反抗してんのか、わかるか？」

彼は冷静に、しかし心は焦った面持ちで問いかける。

「ん……親父曰く、『制限させられている』とか言ってたな」
「と言うと？」

「何かしようとする、途中でやめなくなる、もしくはやる気が無くなってしまうんだってさ。その原因が天使だとか。大昔から人間はわかってたらしいぞ」

「……そうなんだ。……教えてくれてありがとう」

「なんか思いつめてるな。つーかお前が礼、言うなんて似あわねえ」

「うっせえ。語尾のあれ、解禁な」

「うげ、マジかよ。あなた」

午後の授業。千秋の頭は昼休みのことではいっばいだった。

「この問題を……久原。答えてみる」

春人が当てられた。彼は立ちあがり、

「アテネです。あなた」

「………よろしい」

授業内容も耳には入るが、頭に到達することはなかった。

帰り際。たまたま蓮華と一緒にになった。ちょうど良いので、

「なあ。反抗勢力レジスタンスって知ってるか？」

さっそく、聞いた。

「知ってるわよ。天界では常識だもの」

「そうなのか？」

「ええ」

「んじゃあさ。ほつといて大丈夫なのか？」

千秋の質問に蓮華は鼻をふんと鳴らして答える。

「大丈夫よ。人間は天使自体に触れないし、私のような人間界に来てる天使も素状さえバレなきゃね」

「ふーん。……バレたらどうなるんだ？」

「天界から追放される。過去に何人か追放され、9割が墮天使になつてるわね」

なんともおそろしいものを聞いてしまった。

「そっか……」

2人はとぼとぼ、歩きだす。

会話がないのはつらい。おいおいおいおい。男女のペアだぜ。傍から見ればカップルに勘違いされちまうじゃねえか。俺は神冬が好きなのに……。

だいたいなんだよ。俺から質問しないと全然しゃべんないじゃん。あー気まず。

なにこいつ。さっきまで私に質問ばっか浴びせてきたのに……急にだまって……。

普段はあんまりない2人つきりなんだから……もう少し会話ぐらい弾ましてよ。

もう……。

そろそろ千秋の家も近づいてきたころ、蓮華が口を開いた。

「千秋は、学生だけど、天使の本分を忘れちゃあだめだよ」

「わかつてるよ」

「それと、役目だけど、たまに天界から使い魔がくるの。こいつの心に入って悪を滅しろとか指令が下りるわ。多分、千秋のほうじゃなくて私に来ると思うけど、そのときはまた共闘ということだ」

「ああ」

「そんじゃ。体は大事にしなさいよ。バイバイ」

蓮華は千秋に笑顔向け、走っていつてしまった。
彼が見た笑顔は、バックに夕日が照らし、心臓がドキッとするの
を感じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8896w/>

エンジェル・ライフ

2011年10月10日03時25分発行